

井上靖「夏草冬濤」論

——洪作像に見る両親不在の影響——

高 木 伸 幸

はじめに

井上靖の「夏草冬濤」(昭和三十九年九月二十七日～四十年九月十三日『産経新聞』)は、作者自身の沼津中学校時代を素材にした自伝的長篇小説である。同じく作者自身の伊豆湯ヶ島における小学校時代を描いた自伝的長篇「しろばんば」(昭和三十五年一月～三十七年十二月『主婦の友』)の続篇に該当する。⁽¹⁾これまで主人公洪作の「成長」を、特に「青春の目覚め」を明るくユーモラスに描いた小説と評されてきた。⁽²⁾ただし、必ずしも十全な成功作として迎えられてきたのではなく、そのモチーフに関わる洪作と上級生たちとの交友関係については表現が通俗化しているとの批判が為されている。⁽³⁾

確かに「夏草冬濤」のモチーフをそのように解釈することは可能であり、またその解釈に従えば洪作と上級生との交友関係の描写を

通俗的と見做しても差し支えない。

しかし先行論では、「夏草冬濤」の物語の柱と云うべき重要な設定が見逃されてきた。主人公洪作は両親の下を離れて生活する中学生として描かれているのである。洪作が置かれているその境遇を踏まえれば、「夏草冬濤」のモチーフは、いまし異なる角度から捉え直せるであろう。同時に洪作と上級生たちとの交友関係も必ずしも通俗的な表現に留まらないと言える。

本論では従来指摘されてきた問題点を検討しつつ、自伝的小説としての事実関係にも目を向けた上で、「夏草冬濤」のモチーフを再考してみたい。

一

主人公洪作は沼津中学校の生徒。物語開始の時点において三年生の夏休みを迎えている。一年時は両親と暮らし、浜松中学校に通つ

ていたものの、二年時より軍医である父の台北転任のために両親から離れ、三島にいる伯母^いむめのもとに下宿している。同級生の増田、小林とともに三島から沼津へ徒歩通学し、彼らと親しんでいた。洪作の学業成績は浜松中の一年生の頃、学年全体二百名の中で二番だった。だが沼津中の二年では百名中で八番となり、三年時にはさらに下がり始める。通学途中で鞆を紛失するなどとして、心配した台北の両親から沼津の寺へ下宿させる話が持ち上がる。

洪作は年末年始になって、小学校時代を過ごした湯ヶ島へ帰省する。祖父母や伯父と接し、地元の少年たちと戯れる。

洪作は中学三年の終わり近くになって、一学年上級である金枝、藤尾、木部、餅田に惹かれ、彼らと関係を深めていく。成績はますます下がり、寺への下宿が決まるものの、上級生グループから寺での生活を羨ましがられ、洪作はむしろ歓迎する気持になる。四年生に進級した洪作は、金枝、藤尾、木部、餅田と西伊豆の旅に出かけ、物語は結ばれる。

以上、全十三章から成る「夏草冬濤」について、大里恭三郎は前編（一章から六章の半ばまで）、中編（六章半ばから八章まで）、後編（九章から十三章まで）に区分している。¹それぞれ「洪作と増田、小林の交友」、〈洪作の湯ヶ島帰省〉、〈洪作と金枝、藤尾、木部、餅田の交友〉が物語の中心に据えられており、適切な見解と言える。ただし一章は夏休みの水泳講習会を舞台に洪作と金枝らの出会いを

描き、後編への伏線の役割を果たしている。この一章は前編から外して全体の序と位置付けるべきだろう。本論ではそのように微修正した上で、大里の区分に従うこととする。

序と後編で主に描かれる金枝、藤尾、木部、餅田はやや不良がかった文学好きなグループとして設定されている。洪作は彼らに「さらさらしたもの」を感じ、その姿は「自分とはまるで違った世界に住んでいる大人」に思えた。対して前編に主に登場する増田、小林は、上級生グループとの対比から、洪作の目に次第に「光のない平凡な少年」に見えてくる。

さらに洪作は中編で湯ヶ島に帰省した際、「自分の少年時代」が「一年一年、過ぎ去って行く」こと、いわば自らの少年期の終わりを感じていた。

こういった洪作の視点、そして序を置いた三部構成を踏まえれば、「夏草冬濤」は友人関係の変化を描きつつ、洪作の少年期から思春期への脱皮を表しているように見える。増田、小林と交わっていた前編は洪作の少年期、湯ヶ島に帰省した中編は少年期からの脱皮へ向けた準備期、金枝、藤尾、木部、餅田と付き合い始めた後編が青春の開始期と解釈できる。「夏草冬濤」の主要モチーフとして、洪作の「青春の目覚め」が指摘されてきた所以である。

しかし、磯貝英夫は洪作と上級生グループの交友について、「少年期を抜け切らない増田や小林の持たぬ、文学青年たちの内面性に

洪作がひかれてゆくことを作者は説いているのだが、すべてはことばだけで、実際にあらわれる文学青年群像は、奇矯をてらう、未熟な遊び人たちにすぎない」と論ずる。「夏草冬濤」の後編は「低俗読物のそれにちか」く、「ほとんど読むに堪えない思いが強い」と酷評している。

大里恭三郎も同じ交友関係について、「すぐ腹が減り、何かというとすぐ取っ組み合いをする無類に陽気な青春群像」に見えると分析し、それ故に物語の後編は「中間小説といった印象」だと、やはり否定的に評している。

洪作と上級生グループの交友関係、その中で洪作の変化の内実について、少し具体的に確かめてみたい。

上級生グループの中でも、例えば藤尾は教師の物真似を級友たちの前で披露し、注目を集めている。本部は時々大声で叫び仲間たちを驚かせている。金枝、餅田も含めた彼らは学校から禁ぜられたラーメン店での飲食を繰り返し、洪作も誘われて同席するようになる。洪作はそのような彼らに比して、増田、小林は「すること為すこと常識的」だと評し、「勉強、勉強と、勉強に夢中になっているが、そのくせ、それほどきはしない」と考えている。

藤尾、本部ら上級生は教師を恐れず、学校の規則など気にも留めていない。対して増田、小林の二人は、親や教師の教えからはみ出さず、大人しく勉強している。洪作には自身と増田、小林が持たぬ

自由奔放さ、ユニークなまでの明朗さにおいて、上級生たちが大人に見えたのである。上級生たちが時に示す文学への関心も、学校の勉強とは異なる世界を洪作に感じさせたのであろう。

もともと洪作は物語の当初から成績を下降させつつあった。だが、それでも増田、小林と親しんでいた時点では成績を気に留め、回復させようと努めていた。その洪作が上級生グループと関係するようになると、成績は下から数えた方が早いくらいまで下降し、喫煙も試みるようになった。だからこそ両親は洪作を寺へ下宿させようとするが、洪作は送られてきた寺への引越し資金を使つて金枝、藤尾、本部、餅田と西伊豆の旅へ出かけていく。

すなわち洪作は上級生グループの影響により、自らも自由奔放に振る舞い始めているのである。洪作は〈親、教師に素直に従う受動的な生〉から〈自らの意志を持ち始めた能動的な生〉へ移行しており、その変化を少年期から思春期への脱皮と捉えても間違いではない。大きな括りにおいては自我の目覚め、洪作の一つの「青春の目覚め」だと言い得る。そして上級生たちの文学好きという設定をそのまま受け取れば、そこには洪作がやがて文学に目覚めていく気配もそれなりに表されている。

しかし上級生たちを増田、小林と比べて「大人」と見做しているのは、あくまで洪作である。親、教師を初めとする年長者の立場から捉えれば、洪作が考えるほど大人ではなからう。先行論に指摘さ

れている通り、上級生たちは「無類に陽気」であるばかりで、「奇矯をてらう、未熟な遊び人たちにすぎない」。なるほど上級生たちは時に短歌や詩を口ずさんだりするが、仲間同士で心の悩みを打ち明け合ったりする場面はなく、その分文学への関心も表層的に思える。要するに上級生たちは自由を知るだけで、実際の「大人」の行動、自立して生きていく力を身につけることには理解が及んでいない。洪作は彼らの影響を受け、彼らのごとき風貌を呈し始めているのである。当時エリートである中学生とすれば、己が置かれた立場を見失ったかのような変貌と言え、本格的な「成長」を遂げたのでは決してない。

例えば洪作は前編で増田、小林と将来を語り合い、それぞれ弁護士になりたい、サンフランシスコの農園で働きたいという目標を抱いている二人に対して、何も定まっていないうちに自分に不安を感じていた。中編で湯ヶ島に帰省した際には、代々医師の家系の長男として、自分は医師になるべき運命にあるのではないかと考えている。しかし後編に入って上級生たちと仲を深めると、洪作は自分の将来について思案する様子を見せなくなってしまう。三年生の最後に成績を大幅に下げた時などは、医師の道へ進む不安を上級生たちに打ち明け、将来について話し合うなどしてもよさそうであるが、洪作と彼らの関係はそのような方向には決して進まない。洪作は木部から「ひとから成績を訊かれたら、まあ、まあ、だ、と言え」と言われ、

その助言に目から鱗が落ちたかのように納得させられている。洪作は上級生たちから、重い話題にはむしろ目を背ける方法を教えられているかのである。自身の未来に向けた姿勢に限って言えば、洪作と増田、小林の関係の方が洪作と上級生たちのそれよりも「大人」と言ってもいいくらいであり、上級生たちの影響によって洪作はむしろ後退しているようにも見えるのである。

つまり「夏草冬濤」を洪作の「成長」、「青春の目覚め」の物語と捉えるのは、あくまで洪作の視点に立った解釈と言える。親、教師の立場から捉えた場合には、思春期と言っても底の浅い段階であり、洪作はせいぜい反抗期に突入したに留まっている。そして「夏草冬濤」の後編が通俗化、中間小説化しているという批判は、この洪作の視点に対して年長者が抱く違和感から生じていよう。

洪作は上級生たちに「さらさらしたもの」を感じ、その影響下にある自分を「さらさらしたもの」を採集にでもきた探検隊の一員」のように考えている。洪作と同世代の読者であれば、そうした洪作にもある程度同化でき、エンターテイメントとして楽しめるかもしれない。実際、「夏草冬濤」は明るくユーモラスな小説として一部から評されてきた。しかし年長の読者から見れば、かくなる心情は到底納得できず、不快にさえ思ってしまう。未熟な上級生を手放して礼賛し、彼らとの好ましからざる関係を無自覚なまま楽しんでいるようにしか見えないからである。

しかし、この洪作と年長者の間に置かれた、いわばギャップについては、作者としては実は計算済みで、むしろ意図した表現であるのかもしれない。後編では上級生グループから影響を受け、親、教師から見れば好ましくない方向へ変化していく洪作を敢えて描いているのではないだろうか。そのことをより精確に理解するためにも、次には自伝的小説である「夏草冬濤」の事実関係を確かめておきたい。

二

先にも触れた通り「洪作は一年生の間を浜松中学で送り、二年の初めに沼津中学へ転校して来た」。「洪作が浜松中学から沼津中学へ転校したのは、軍医だった父が、浜松の連隊から台北の師団へ転任することになり、母や弟妹は父と一緒に台北へ行ったが、洪作だけは同じ静岡県でも郷里に近い沼津の中学へと転校し、三島の伯母の家からそこへ通うことになったのであった」。洪作は中学四年時五月に設定された物語末尾で伯母の家を出て沼津の寺、妙高寺に預けられている。洪作は伯母の下で二年余の間、中学生生活を送っていたのである。

いずれも事実を素材にした設定でありつつも、決して事実そのままでなく、幾分かの変更が加えられている。

井上靖は実際に一年生の間を家族と同居し、浜松中学校へ通って

いた。^⑨ただし、軍医である父は浜松の連隊でなく遼陽の駐屯地に赴任しており、その時点から不在であった。翌年になって作中と同じく父は台北へ転任の内示が出、井上靖も沼津中学校へ転校している。しかし、井上靖は洪作のように転校と同時に家族の下を離れ、伯母の家に下宿したのではない。最初の一年間、つまり中学二年生の間は三島で母、弟妹と暮らしていた。翌年の中学三年時には母、弟妹波満子が台北の父の下へ移っているものの、靖は妹静子とともに同じ三島で湯ヶ島から出てきた祖父母と生活していた。中学四年に進級するに至って妹静子も台北へ移り、祖父母は湯ヶ島へ帰ったため、そこでようやく靖は三島の伯母へ預けられたのである。また靖が沼津の寺、妙覚寺へ預けられたのはその翌年、作中より一年遅い五年生に進級してからであった。

つまり井上靖は中学五年間、父とは完全に離れていたものの、中学一・二年時は母、三年時は祖父母という、直系の親族の監督下で生活していた。妙覚寺へ預けられたのも実際は五年時であるから、井上靖が伯母の家より通学したのは一年間のみであった。父母も祖父母も身近にいない、この伯母の家での下宿期間を作中は拡大しているわけである。「夏草冬濤」に祖父文太は少しだけ登場するものの、母七重と父は話題に上るだけで、具体的に登場する場面は全くないことも指摘しておきたい。

井上靖は中学時代の家族との思い出として、次のように書いて

いる。⁽¹¹⁾

そうした私の少年時代で最も大きい出来事は、中学の四年と五年の夏季休暇に、家族の者が住んでいる台北へ行ったことである。(中略)そして台湾で家族の者たちと二、三週間一緒に生活し、上級学校へ行かねばならぬということをそれまでも漠然とは感じていたものの、その時初めて意識して考えるようになった。自分の前に突き破らなければならぬ障壁があるということを知った思いだった。

井上靖は中学時代、父母両方と離れて暮らした期間においても、夏休み中とともに生活していた。その休暇中に限っては「上級学校へ行かねばならぬということ」、つまり自らの進路について考えねばならないような、いわば父母による厳しい説論の時間を持たされていたのである。作中では父母不在のため、このことはもちろん触れられていない。

洪作の友人たちのモデルについても確かめておきたい。

増田、小林の二人は、それぞれ増田潔、小林太郎という同姓のモデルが存在する。井上靖は二年時より浜松中から沼津中へ転入して彼らと知り合い、作中と同じく三島から沼津まで一緒に徒歩通学していた。⁽¹²⁾しかし、増田潔は三年生へ進級すると同時に井上靖とは逆に浜松中へ転校し、小林太郎も三年時の九月に広島県福山中学校へ転校したため、彼らとの友人関係はそれぞれ一年と一年半で終わっ

ている。⁽¹³⁾作中では洪作が増田、小林と絶交しているが、実際は転校というやむを得ぬ別離だったのである。

金枝、藤尾、木部、餅田の上級生グループ四人も、それぞれ金井廣、藤井壽雄、岐部豪治、望月録郎⁽¹⁴⁾という実在の人物をモデルとしている。⁽¹⁵⁾井上靖は沼津中学校時代に彼らと実際に深い関係を持ち、西伊豆の旅に出かけ、彼らから文学的な影響を受けたと多くのエッセイで回想している。⁽¹⁶⁾彼らはもともと井上靖より一学年上級であったが、藤井、金井の二人が病による留年をしたため、靖が四年時より同級生となり、上級のままであった岐部、望月も併せて靖と親しくなったとのことである。作中では藤尾のみ留年とされているが、実際は金枝のモデルである金井も留年していた。藤尾のみ留年とし、金枝を留年させなかったのは、後者を級長として描いており、その設定とイメージが合わなくなるのを避けたためであろう。もつともモデルの金井も留年生でありながら級長を務めていたそうである。

このような井上靖と金井ら四人の交友が、靖の四年時から、つまり両親、祖父母の監督から離れ、伯母のもとで下宿生活を始めた丁度その時期から始まっていることに注目したい。井上靖にとって彼らとの関係は、厳しい監督者不在の下で始まり、その中で為されたものであったのである。

ここで井上靖の中学校時代の学業成績を確認しておきたい。浜松中に在籍していた一年時は学年全体百八十名の中で四番であった。

三

沼津中に転校して以降、二年時は百一名中十三番、三年時は九十四名中二十一番、四年時は九十名中五十三番、五年時は七十六名中四十七番となっている。⁽¹⁾一年時は父不在でも母が居り、家族の下から通学していた故の好成績と言える。二、三年時にはやや順位を落としているものの、それでも母、祖父母の監督があつたために何とか上位二割前後に収まっていた。しかし四年時より伯母の家に下宿し、両親、祖父母とも不在となった。さらに金井、藤井、岐部、望月との出会いもあった。それらが四年時の大幅な成績降下に繋がつたのは明らかである。

「夏草冬濤」における洪作の学業成績は、右のとき井上靖の中学五年間の足跡が学年進行を短縮した上で重ねられていると言えよう。成績を下降させていくその過程が概ね一致しており、特に後編に描かれる三学年修了時の洪作の大幅な成績降下は、井上靖の四年時のそれを原因も含めてそのまま映し出した感がある。

以上のごとく、井上靖は「夏草冬濤」の創作において、自身の中学校時代の中でも家族、両親から離れていた事実をより強調していた。そして、その境遇下での重要な出来事として、金井らとの交友関係や自身の成績降下をほぼ事実に沿って取り上げていた。つまり厳しい監督者が不在となった洪作の姿を、特に友人による影響を絡めて描こうとしているのである。その作者の意図に留意しながら「夏草冬濤」の本文を改めて読み直してみたい。

例えば洪作は下宿先で、伯母むめとその息子俊記のやり取りを目にして「親猫が子猫にじやれているような、そんな甘い平和なもの」を感じる。二人の間には「割り込んでいけぬもの」があるとも考えている。藤尾の家へ初めて訪問した場面では、藤尾の姉が「カステラと紅茶を持ってきた」のを見て、洪作は「家庭というものはいいな」「友達が来ると、こうしてお菓子をだしてくれる」と思っている。さらに洪作は同級生の磯村から夕食に招待され、磯村の母、姉からも温かく響応された後、帰り道で「ふいに淋しさに襲われ」ている。

両親と離れている洪作は家庭の温かさを羨み、自らの境遇に淋しさ、孤独感を抱いていた。当然であるが、洪作が抱えた心情として押さえておきたい。

いま少し細かく「夏草冬濤」の洪作像を確認してみよう。

例えば洪作はいつもシャツを着ないで裸のまま制服の上着を身につけ、その一番上のボタンは外れている。靴下も履かず、真っ黒な足をそのまま靴に入れている。部屋の片付けをすれば、「ペン先、ピン、クリップ、清涼剤の小型容器、インキ壺の蓋」などを窓から外へ放り出してしまう。さらに洪作は増田、小林、藤尾ら親しい友人としばしば取っ組み合いをし、通り掛かった漁村の青年にも立ち

向かっていくなど、何かと腕力に訴えようとしている。

これらは旧制中学生である洪作のバンカラぶりを表現しているとも言えよう。しかし、決してそれだけであるまい。両親が、特に母が不在である中学生にありがちな姿をそこから見出せるであろう。毎日母の目に触れていれば、服装の乱れや粗暴な振る舞いは厳しく注意され、正されるはずだからである。洪作は母の目が届かないが故に、言動、身なりが粗雑になっている中学生として描かれているのである。

なお湯ヶ島で初詣に出かけた場面で洪作は、「お母さんが長生きをしますように」と祈っている。いつも母と離れているだけに、母を恋しく思う気持は人一倍強く、だからこそ孤独感も抱えていたと言えよう。

洪作に向けてられた以下の四つの台詞にも注目したい。

まず前編で成績の下がった洪作が増田と一緒に夜遅くまで家へ帰らず、周囲を心配させた場面。洪作は近所で顔なじみの旅館の女中から「この子、だんだん悪くなる（中略）もう、伯母さんの手に負えない」「わたしでも伯母さんでもだめ」と叱責されている。

次いでこれも前編にて洪作を寺へ預ける相談をする場面。洪作は祖父の文太から「だんだんお前は悪い子になる。鞆は失くすし、成績は下がるし、伯母さんの手に負えなくなる」と言われている。

さらに後編に入って、大幅に成績を下げた洪作へ増田が忠告して

いる。増田は洪作が「最も親の愛情を必要とする時に、両親の許から離れて」おり「家庭の愛というものを知らない」から「君が勉強しなくなるのも、そりゃ、無理が無い点もある」と同情している。

もう一点、後編で上級生グループの仲間となった洪作に対して、金枝が次のように評している。

「洪作は孤独を知らないな（中略）本当はお前が一番孤独を感じていい環境にあるんだ。小さい時から、ずっと両親から離れてひとりで居るだろう。だけど、お前は孤独という気持を知らんと思うな（中略）友達次第で模範生にもなれるし、不良にもなれる。」

前編の二つでは、ともに洪作が「伯母の手に負えなくな」っていると述べるものの、これは伯母への批判でなく、どちらも両親による厳しい監督の必要性を遠回しに訴えた台詞と言えよう。洪作は上級生グループとの交友を始める以前から、少しずつ成績を下げ、素行を悪化させるなど、「だんだん悪くな」っていた。両親の下を離れているのが原因だと主張しているのである。そのことを、〈顔なじみの旅館の女中〉と〈祖父の文太〉という、親、教師と同じ年長者の立場から表現していることに留意したい。

後編の増田の台詞は、これら前編の二つの台詞で表したところをより深く踏み込んで説明していると言えよう。「親の愛情」「家庭の愛」に対する洪作の飢餓感を捉えている。既に上級生グループと関

係を深めていた洪作に向けられており、洪作が彼らに近づいて行った理由もここに暗示されている。増田は洪作の同級生でありながらも、洪作に「常識的」と思わせるような、いわば親、教師に準じた立場からこのように発言しているのである。

最後に上げた金枝の言葉は上級生グループの目に映った洪作の姿を語り、上記の三つの台詞からは見えにくい洪作の心の裡を明かしている。一見すると金枝は洪作の孤独感に気付いていないようであるが、金枝の無理解でなく、洪作は上級生グループの前に居る限り孤独を感じていなかったことを示す。洪作は両親不在による孤独を忘れたくて上級生グループに近づき、彼らを持つ自由で明るい空気に包まれながら孤独を癒していたのである。また洪作は「友達次第で模範生にもなれるし、不良にもなれる」、つまり厳しい監督者がいないために周囲に染まりやすくなっていたことが確認できる。もし両親が近くにいれば、やや不良がかった上級生グループとの交友は当然反対され、仲間に入るのは難しかったであろう。しかし父母から干渉されずに済む洪作は上級生たちに接近でき、直ちに彼らに染まっていたのである。洪作は金枝に「冗談じゃないよ。俺だって、孤独ぐらい知ってる」と反論しつつも、「まあ自分にはそうしたところがあるかも知れぬと思」い直し、納得した様子を見せている。

このように洪作は両親の下を離れているが故の孤独感を抱え、厳

しい監督者がいないために年長者から見れば悪い方向へと変化している。そして後編における上級生グループとの交友は、その洪作像の変化の中でも、最も大きく決定的な影響を及ぼした出来事として位置づけられているのである。

おわりに

井上靖は自らの中学校生活の中でも両親と離れていた期間を回想して、「いま思うと、多少野良犬の感がないではない。監督者がいないということは怖いものである」と書いている^⑧。この発言も踏まえば、「夏草冬濤」は思春期突入の前後にある中学生が両親から離れて暮らす中で大きく変化していく様子を主要モチーフに描いた小説と見做せよう。

父母が不在であれば言動は粗雑になり、孤独感を抱く故に友人に惹かれ、友人から大きな影響を受けてしまう。親、教師から見れば、好ましからざる友人ほど魅力を感じ、仲間に加わってみせる。その友人関係の中で成績や将来の進路など重い話題は避け、ひたすら自由奔放に楽しく振る舞っていく。年長者には成長と思えない、むしろ悪化とおぼしき変化であるが、本人にとってそれは自らの青春、大人への第一歩と自覚される。井上靖は洪作の姿を通して、そのような一つの変貌の過程を表現したのである。

洪作と上級生グループの交友関係が通俗的な印象を与えるとの批

判は必ずしも否定できない。若い読者に向けた青春エンターテインメント小説のごとき趣がある。しかし「夏草冬濤」のモチーフを上記のごとく捉え直せば、年長者がこの小説に抱かされる違和感も作者の意図した結果として見えてこよう。特に後編の洪作像に対して親、教師のごとき立場から心配させ、やきもきした気分を抱かせることも狙いの一つであったと言い得るからである。

井上靖は「しろばんば」で血縁関係のないおぬい婆さんとの生活を中心に据えながらも、洪作の少年期らしい真つ直ぐで健全な成長を主に描いた¹⁹。対して「夏草冬濤」では洪作が友人から受ける影響に託して、監督者不在の危うさを表現しているのである。一つの親子関係を直接的でなく、友人関係から浮かび上がらせた稀有な小説と言えよう。

最後に洪作の母と上級生グループに対する表現から垣間見える井上靖の創作姿勢について補っておきたい。

洪作の成績降下に関連して、伯母は「あんたとこのお母さん、みんなこの伯母さんが悪いと言うに決ってる」と言い、祖父も「自分は遠くに離れていて、自分の子供の近くに居る者を叱る」と口にし、ともに息子の面倒を自分で見ない洪作の母へ不満を表明している。これらの言葉には、自身の母に対する井上靖のやや批判的な見解が表れている。作中ほど長くはなかったものの、実際にある期間、中学生の息子と離れて暮らしていた母。その間、息子を他人任せに

しながらも、ごく稀に顔を合わせれば進路のことなど説論していた母。井上靖にとって「夏草冬濤」の創作は、そのような母と自身の関係について見詰め直す作業でもあったのである²⁰。

一方、上級生グループは先述のごとく、親、教師には大人と思えない人物として描かれつつも、洪作にはそれが「大人」に見えている。その捉え方のギャップによって監督者のいない洪作の内面を露わにしているのである。しかし上級生グループが常に洪作の視点から評価され、表面上は上級生グループ礼賛に終始している結果として、彼らに対する客観的な評価が見えにくくなってしまったことに注意したい。同級生の増田、小林が上級生グループを「不良」と批判し、美術教師の眉田が教室を抜け出し昼寝していた木部、藤尾、餅田の三人に向かって説論する場面などもある。しかし、それらも結局は洪作の上級生グループ肯定に繋がっている。伯母、祖父が洪作の母を批判してみせたように、洪作以外の第三者、特に年長者から見た厳しい上級生批判がどこかで為されるべきだったのではないか。

上級生グループのモデルである金井、藤井、岐部、望月は、作中に描いたごとく井上靖の成績を大きく降下させ、しかし父母不在による孤独感を癒してくれた存在であった。井上靖は彼らと交友していた中学校時代の自分に危うさを感じつつも、彼らに対してむしろ感謝の念を抱いていたに違いない。またモデル四名のうち、早世し

た岐部を除いた三名は「夏草冬濤」連載時も存命中で、特に藤井、金井の二人と井上靖は親密な関係が続いていた。「夏草冬濤」はいわば生涯の友人との出会いを取り上げた小説でもあったのである。

かくなる実際の友人関係もあって、井上靖は上級生グループを描くに際して、モデルとの距離を測りかねるところがあったのかも知れない。当時を回想して作者自ら楽しんで書き進めてしまった側面もある。例えば後編に入ると前編、中編に比して戯画的な会話体が多く目につく。洪作の視点から筆に酔い、過剰なユーモアを抑制しきれなくなった結果と言える。後編が通俗的に見える一つの要因として指摘しておきたい。

注

(1) 「自作解題」(『井上靖小説全集第二十六巻 夏草冬濤』昭和四十八年五月、新潮社)

(2) 篠田一士「平凡な少年襲う春の嵐・『しろばんば』につづく自伝小説・井上靖著『夏草冬濤』」(昭和四十一年七月九日『サンケイ新聞』、足立巻一「ユーモアのある自伝的小説・井上靖著『夏草冬濤』」(昭和四十一年七月九日『読売新聞』(夕刊・大阪版)、巖谷大四「すがすがしい自伝もの・夏草冬濤」井上靖(昭和四十一年八月二十日『鹿児島新報』、三枝康高「沼津中学校と『夏草冬濤』」(『井上靖—ロマネスクと孤独—昭和四十八年十月、有信堂、岡田英雄「『夏草冬濤』と『北の海』」(『近代作家の表現研究』昭和五十九年十月、又文社、大里恭三郎「『夏草冬濤』論—詩の存亡—」(昭和六十二年十二月『国文学解釈と鑑賞』)など。以

上のほか、新潮文庫版『夏草冬濤(下)』(平成二十五年一月、二十九刷改版)の背表紙には、以下のような紹介文が見られる。「陽の光輝く海辺の町を舞台に、洪作少年がいかにして青春に目覚めていったかをユーモアを交えて爽やかに描き出す。『しろばんば』に続く自伝長編。」

(3) 磯貝英夫「井上靖と私小説」(昭和五十年三月『国文学解釈と教材の研究』、大里恭三郎「『夏草冬濤』論—詩の存亡—」(注(2) 前出)

(4) 大里恭三郎「『夏草冬濤』論—詩の存亡—」(注(2) 前出)

(5) 中編における洪作の湯ヶ島帰省は、洪作を湯ヶ島に立たせることで「しろばんば」の世界を再現し、同作の愛読者へ向けてサービスする狙いもあったと言えよう。

(6) 岡田英雄は「夏草冬濤」と「北の海」(注(2) 前出)で以下のように論じている。「夏草冬濤」では六、七、八章を湯ヶ島帰省とその生活叙述にあてている。この生活体験を境に洪作は小林、増田らのグループから、藤尾、金枝らのグループに接近していくことになる。言いかえれば平凡な、それだけ少年らしい思考、感覚の生活から脱皮して、大人びた、それだけキラキラした、少年なりに人生を考え、行動する青年期へと移行するのである。」

(7) 磯貝英夫「井上靖と私小説」(注(3) 前出)。ただし磯貝は「夏草冬濤」の「前半部」については、洪作少年の「繊細な感受性」の表現において評価している。

(8) 大里恭三郎「『夏草冬濤』論—詩の存亡—」(注(2) 前出)。ただし大里は「夏草冬濤」の前編・中編については、作者の「詩人としての感性」の「躍動」において評価している。

(9) 以下の事実関係は、藤澤全「若き日の井上靖研究」(平成五年十二月、三省堂)に拠った。

(10) 井上靖の父雄雄は台北衛戍病院長への転勤の内示を靖の中学一年時に受

け取っている。だが、実際に隼雄が台北へ赴任したのは靖の中学二年時の秋であった。藤澤全『若き日の井上靖研究』（注（9）前出）参照。

- (11) 「私の自己形成史」（昭和三十五年五月～十一月「日本」）。ただし藤澤全『若き日の井上靖研究』（注（9）前出）によれば、井上靖が台北の両親の下を訪れたのは中学四年時と、中学卒業後の浪人生活時であった。従って引用文に見る中学「五年」時の台北行は、おそらく浪人生活時と混同した井上靖の記憶違いであろう。しかし井上靖が両親と離れていた期間でも、夏休みには父母と過ごす時間を持ち、両親から進路について考えさせられたのはこの文章から確認できる。

- (12) 「夏草冬濤」前編の冒頭、つまり二章の書き出し部分は二学期始業式に設定され、洪作が増田、小林と徒歩通学中にカバンを紛失している。具体的な年号、西暦は明かされていないものの、洪作が中学三年生であることをそのまま井上靖に重ねれば、この日は「大正十二年九月一日」、つまり「関東大震災」の当日となる。「夏草冬濤」の舞台である沼津と三島も関東大震災の影響を被っており、井上靖もそれ相応の被災体験を持っていたの言うまでもない。しかし作中にそれらしい記述は全く見られない。井上靖は関東大震災を描く代わりに、洪作のカバン紛失事件を創作しているのである。「夏草冬濤」の物語を明るく、ユーモラスな方向に導こうとしているのが確認できよう。

- (13) 増田潔『夏草冬濤』の悪童たち「洪作と小林と私」（昭和四十三年三月月『芸文静園』）、藤澤全『若き日の井上靖研究』（注（9）前出）参照。
- (14) 望月録郎は後に稲見姓となった。佐藤英夫『井上靖青春記』（平成十六年五月、英文堂）参照。なお藤澤全『若き日の井上靖研究』（注（9）前出）では「望月鉄郎」としているが、沼中・東高八十年史編集委員会名簿（『沼中東高八十年史』昭和五十六年三月、沼中東高八十年史編集会）および『井上靖青春記』では「望月（稲見）録郎」になっている。本論では後者に従っ

た。

- (15) 以下の上級生グループのモデルに関わる考察は、『沼中東高八十年史』（注（14）前出、藤澤全『若き日の井上靖研究』（注（9）前出、佐藤英夫『井上靖青春記』（注（14）前出）に加え、以下の井上靖エッセイを参照。「人と風土」（昭和三十四年十一月「群像」）、「わが青春放浪」（昭和三十七年四月十一日～十七日「読売新聞」）、「青春のかげら」（原題「藤井君を弔う」昭和四十二年三月十八日、藤井寿雄君の告別式に列席して）、昭和四十二年三月「沼津朝日」、「中学時代の友」（『新潮日本文学』44井上靖集）月報5、昭和四十四年一月、「金井君の詩を読んで」（『金井廣』詩集『風の村』昭和五十八年十一月、私家版）、「沼津とわたし」（昭和五十九年七月「沼津朝日」）。

- (16) 井上靖はまず中学五年時の大正十五年一月、藤井壽雄、岐部豪治と西伊豆の土肥へ船で出かけ、次いで受験浪人時の同年七月に金井廣、藤井壽雄、望月録郎と西伊豆の重寺にある藤井の親戚宅に滞在している。作中の西伊豆の旅は、この二回を合わせて描いたものと言える。なお井上靖は一度目の旅の翌月に道中で詠んだ短歌九首を沼津中学校「学友会々報」に発表している。藤澤全『若き日の井上靖研究』（注（9）前出）参照。

- (17) 藤澤全『若き日の井上靖研究』（注（9）前出）参照。
- (18) 「過ぎ去りし日」（昭和五十二年一月一日、三日～三十一日『日本経済新聞』。原題「私の履歴書」）

- (19) ただし「しろばんば」における洪作は、中学校入学に向けて受験勉強に励みながらも、代々医家の長男として本来医師を目指さねばならぬ立場にあることが不明瞭にされている。同じ立場にあって苦しんだ井上靖自身のトラウマを敢えて隠すことで、洪作の真つ直ぐな気性、健全さが強調されている。拙論「しろばんば」と井上靖のトラウマ―受験生としての洪作像を巡って―（令和五年十一月「芸術至上主義文芸」）を参照さ

りたい。

(20) 「夏草冬濤」より約十年先行する安岡章太郎の「悪い仲間」(昭和二十八年六月『群像』)は、大学予科生の主人公「僕」が夏休みに高校生の藤井高麗彦と知り合い、同級生の倉田真悟とともに食い逃げ、遊郭通いなど、数々の冒険を試みる短篇小説である。軍人の父が留守にしている家庭の中で、「僕」は母と濃密な関係にあることが、二人で見詰め合う最終場面に暗示されている。変貌していく主人公の心の奥には、母の存在を重く感じる気持が存している。「夏草冬濤」はこの「悪い仲間」と友人に影響される主人公像を重ねつつも、主人公と母の関わりにおいて対照的である。意図的か否かは別にして、井上靖は「夏草冬濤」を通して、母が子の行動に及ぼす作用を「悪い仲間」とは逆説的な形で描いてみせたとも言えよう。ちなみに安岡章太郎は実際に、母と濃密なそれにあつた。鳥居邦朗編『鑑賞日本現代文学 28 安岡章太郎・吉行淳之介』(昭和五十八年四月、角川書店) 参照。

(21) 井上靖のエッセイ「青春のかけら」「金井君の詩を読んで」(ともに注(15) 前出、藤澤全『若き日の井上靖研究』(注(9) 前出) 参照。

* 「夏草冬濤」および「私の自己形成史」「過ぎ去りし日日」の本文引用は、それぞれ『井上靖全集』第十六巻、第二十三巻(平成八年八月、九年六月、新潮社)に拠った。傍点は私に付した。

— たかぎ・のぶゆき、別府大学・教授 —